

特43

61



濱千鳥真砂の白浪

091273-001-7

特43-61

浜千鳥真砂の白浪

石川五右衛門実伝 (実録文庫)

春陽堂

上

M16

DBN-2130



寶珠多摩 力亭園

濱子鳥真砂の真浪

東京 春陽堂花版



序

昔は

盜賊を稽ふる方今文明近時如彼の無と

七條河原

に於て罪を天麩羅に極刑を受け

醜名

の世は揚物の元祖となりし石川五右衛門な

り

實傳を嘘言の泥坊の願より地獄の釜淵に

未

ま委曲に物して御子様方悪と爲きは斯たぞよ

と懲戒

がてふ善道へ誘引ひとつの種は島狙ひ外を

中りませうと書肆

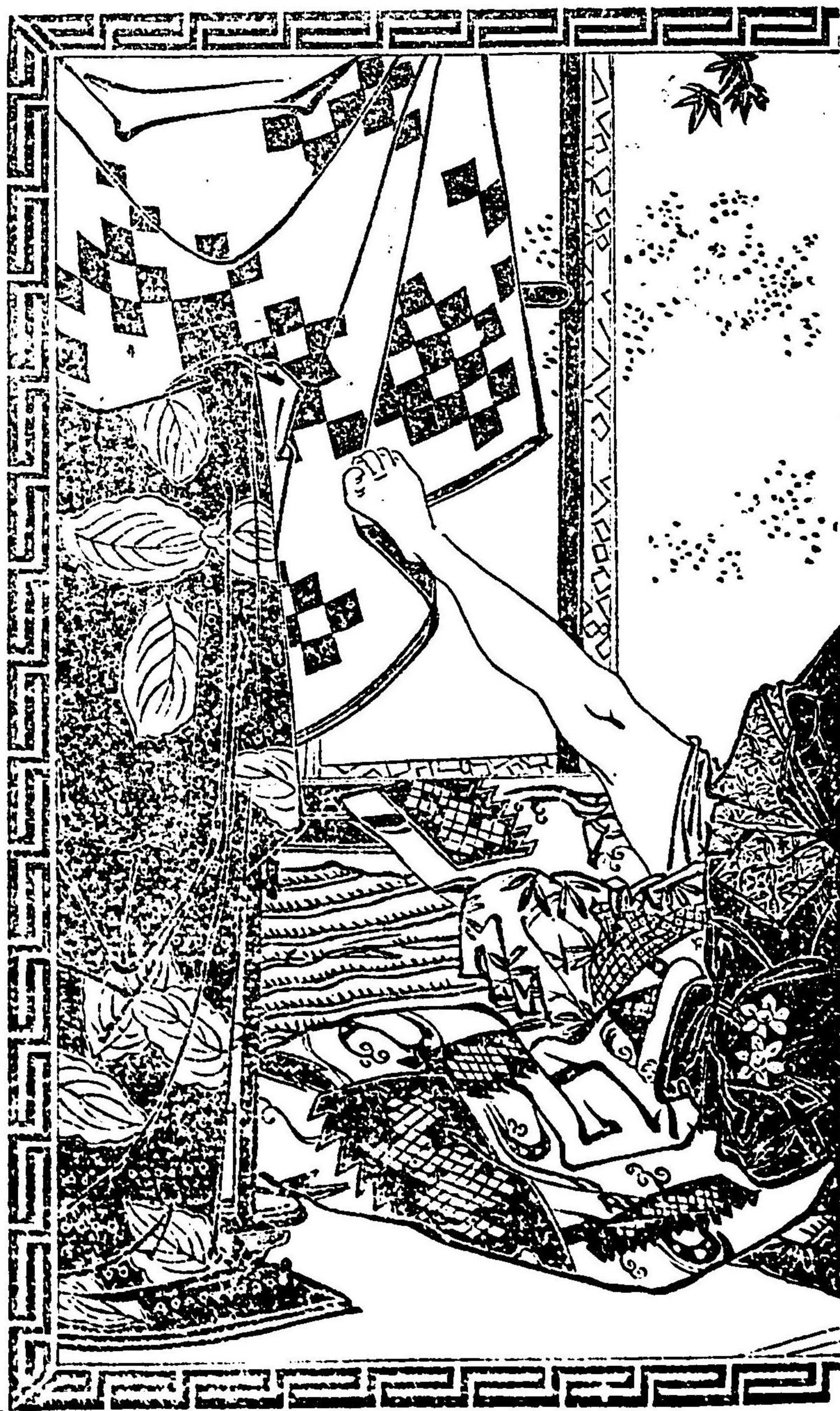
の油と被られて掛る初篇の草稿を

此程

やつとつけましたと口より筆をすぢらかすおとちかり

時よ明治十六年神無月中浣

頓陳問人半馬識



寶錄 濱千鳥真砂の白浪上巻 石川五右衛門實傳

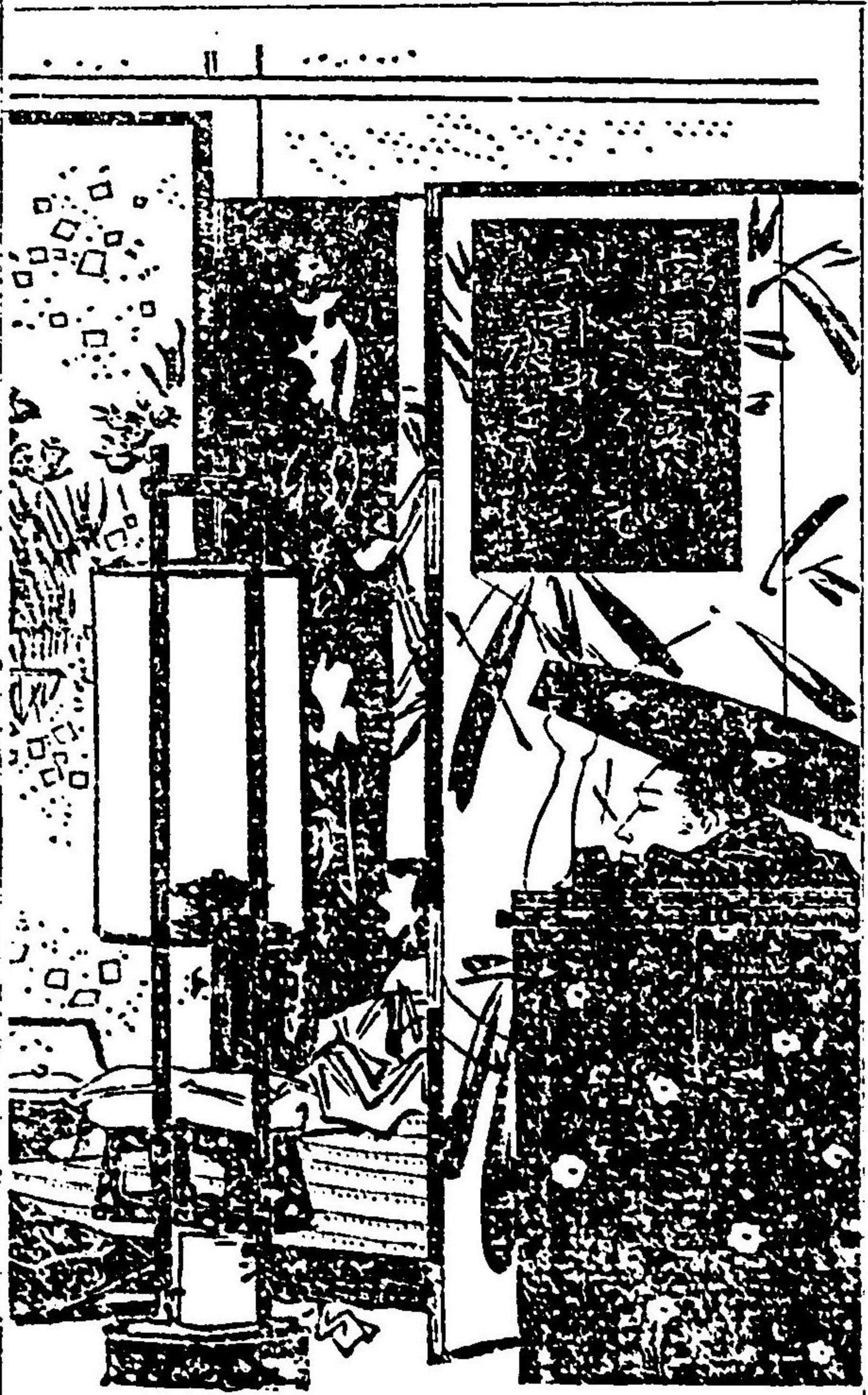
文庫 話説す爰に我國の盜跖と云ふ可き綠林中の魁首石川五右衛門の事蹟をとかに抑々集め先
祖の遠く輕大臣の末葉にて人王七十六代近衛院の御宇に當り石川左衛門秀門と名告る北面
の武士ありける其の頃夜あくく化鳥出て内裏の殿上を踏わり帝を惱まし奉るにより諸
寺諸山に命て種々修所禱有りけれと更に効顯無かりしうに諸卿再度評議ありて此上の弓矢
を以て鎮むるの外ある可うらずと當時北面の武士あて武邊の聞高き人々を選まると佐藤
兵衛常清遠藤將監持遠安藤武者友宗石川左衛門秀門等あり中流石川秀門が父兵衛藏人秀重
の弓術の名人あれは父の業を継ぎし秀門あそ宜うらんと衆評是を決しければ石川秀門を
召され右大臣實行公より發目の法を以て化鳥退治致すべき旨仰渡されければ秀門謹で答
へ奉るよう勅を辭ひ奉るに最畏多けれど乃父秀重にいはし仕損ずべしとも思ひねと未
だ未熟の微臣に及ぶ可くもいはず若し仕損し時家の瓊瑾身の恥辱此儀は免被下可
しと言上しければ諸卿方は是を聽て武門の其加と歡喜て假令一命を擲とも力の限り術を
盡しは憐平癒を願ふ可き家の瓊瑾身の恥辱と最と無慮あるは條違勅の非輕ならず念度ほ

沙汰有るべしと言一同に仰せらるるを守治大臣宜ふより秀門宣言に應せざる野實不直しと
雖ども今主上汚穢に罹らせらるる時あれば大赦こそ願ひしけれど秀細に緯を奏聞ありて
遂に追放と罪を定まり北面の職を召上られ都を退放せられける其のち頼政命を承化鳥を退
治する物譚は茲も用きければ略しぬ扱も石川左衛門の都を追ひ伊賀の國に知音あれば其
地をたより夫より此所に住居たりしが流石北面の武士の果として土地の者も應答を爲す石川
殿と尊むより早晚となく住居の土地を石川村と稱へける大より子孫此村小居て遂に藩主と
かりけるが遙く星霜を経て五右衛門が父五郎太夫の代に至り領主藤堂和泉守高虎公の領
分中あて由緒正しき者を取立て家臣の列あ加へられしが石川五郎太夫も筋口あはれの才立
は召抱へよ成るべきあれども老年故今更仕官も煩しと望みも無く打過しが一子文吾の今
年漸十三歳の總角あれども心剛に力強く其上利口極明にて先祖の家名を興さん此子あ
らんととり沙汰を聞く五郎太夫の心樂しく天晴武士と成さんものと家老藤堂新七をたより
先祖の由緒を申立て我子の仕官を願ひければ早速に聞届られ領主和泉守殿の小性見習を召
出され半年余りも勤めしが生得短慮を文吾あれの慣るる隨ひ傍輩と争闘口論絶の問ふく評

判宜うらされば新七の太く思ひ節々異見を加ふれども更も改心の体あらねば或日五郎太夫を招き寄せ斯うくと打語り上より沙汰の無き間も勤めを引く方よるべしと町察論しければ五郎太夫もこれと雖も直ち文吾の暇を願ひ我家より引取けるが其年の暮父五郎太夫の老病にて亡故ければ文吾の還る孤身となり近所の郷士百地方は養育るゝ身とありける抑も是百地と云ふの名を三太夫と稱し元來伊賀浪人にて武術も長じ其上忍びの術も妙を得たり毎も京都へ往來して花山院殿へ立入し或時花山院殿の仰ける我家も秘藏せる柴舟と云ふ名香の先日大内より給はりて又と得難き品あるが此頃いつこへう紛失かし最と惜しと思ふあり其方の手術才覺めて穿鑿あるまじきやと被仰に三太夫の最と易き事にて一詮義仕らんと御請をあして退出しが此盜賊の他ありあらず必も御内の人あらんと夫より夜なく忍術めて家中の家毎も忍び入伺ぐ所案も違はず近侍の士都部東馬の竊み盗みて己が部屋も秘置るを早くも見出して取返し大納言殿へ差上ければ御悦一方あらす此褒美は何をがあと種々工風ありたりしが元來有富る三太夫なれば金銀杯の望みも有つと思ふ折節先頃三太夫の醉まされば式部といへる奥女中も戯れし事を思ひ出されこれ願竟と

式部を招のれ事の情を仰けるも度も此式部といふ女中の幼稚の時父母を失ひ御殿も成長させし者ゆへ相公の仰をいうで背のん御意の隨意ありと最と心よく承引ければ相公より大い歡喜玉ひ式部を三太夫と下されければ三太夫の意外の賜物難有しと謝し奉り夫より式部を伴ひて石川村へ歸りしが此時文吾の十六歳にて殊も春丈高ければ前髪立の似合しらすと百地が差圖も元服あし舊宅も移りしが已前あいのらず通ひつゝ武術の教授を受けるが一を聞て十を知る才氣あれば上達速く就中忍術の衆も勝れて見えければ三太夫も我道を経可き者の此者ありと一層意を用ひて授けられわづらの間も秘密口傳の奥儀を究り門弟とぞあり又ける斯て又三太夫の去る年京都より式部を伴ひ歸りてこのうた暫時も傍を離れずして寵愛限りありしが本妻いあれども無が如く打捨られし女房か勘の淋しく暮す間の中夫と推して石川文吾人無き折々口説けるがか勘も頃日式部が爲のみりへられしを恨み居ければ遂も文吾が意も随ひ密りも契りも結びける扱其年の冬のはじめ三太夫の上京あして家も在らねば文吾か勘の毎夜の如く忍び逢し阿漕が浦も引潮の時又洩れず度重かればいつしか式部は是を覺り何卒して不義を見付け良人か告て逐出さんと心を付ると知らぬ二浦の

今宵も忍び會ふけり豫てお勘の我臥床の戸障子の開閉も軌る音のするを想ひ或は鳴居よ水を流し又の髪をもて拭ひおどし音のせぬようよ爲てけるも式部はいつり見て置しが今宵も必定忍びしおらんと丑満の頃世出てお勘が居間の鳴居の音へ用意をおせし砂と振撥稿と居間も立戻り襖の開く音を合圖よ立出て事を見露さんと耳を清して待てけり斯在べしとの露知らぬ文吾の最早明方近し明日の夜又と契りつゝ立上りて襖をやと



ら明れば平生も異奇りて軌る音高く響きければすのと式部の紙燭を提げ走り来るお驚くお勘の襖の外へ立出て跡をひしと閉切て動悸胸をおし



鏡め何と語んと工風の容子を式部の最と心地よしと思へば故と聲高く今宵は何とあう物騒しく甲夜より眠らす居たりしが異音の時々聞へて窺ふ忍ぶ曲者の在と覺りていへば一間くを見てありのんと襖の中よ目を着けて返引あらぬ式部の言葉と打聴おがら手廻の影よて敷居を見れば思ひかけあき多くの砂の撒てあれは扱ひ此身の不義を覺り見露はさんと工

みし絆りと思へば憎さ彌増て荒立りの事の破れと最落着し面地して吾情とても良人の留守
 ゆへ萬事心を配りて在れば盜賊の入るも知らずして寐きたるも熟睡て居る宵より眼瞼合さ
 ねど平生おも増して静間ありしお最仰々しく驚かるゝの夢でも見給ひしものあらん荷ふも
 武士の妻應忽を語ふて奴婢等おはしたおしと笑のれん注彦給へとやりこひるを式部の聽て
 冷笑ひ夢の現の知らねども我情の此儘捨難しと若黨久平を呼起す久平の先刻より目を
 覺して居たりしお早速お出來りて兎角且那の留守中又間違有ての中譯おし念の爲家の
 内を我等見廻りしおいと語れてお勘も争ひ難ね其方迄も然思ふから限なく涉獵て見給へり
 し鼠の子だも覺束おしと飽迄侮る口吻を式部の目に物見せんすと久平諸共立上り立圖物置
 所臺所と間毎くを改むるよぞお勘の此間又違さんものと居間又戻りて見る所文吾の影だ
 よあらざれば原來平生學べるゝ忍びの術おて最早くも姿を隠し給ひしあらん斯と知らば最
 初うら式部を寢所へ呼入て鼻あうさせて呉れしものをと獨り言つゝ燈火を挑げ疾く來より
 しと待てける扱式部久平の一間く穿鑿し果て最早お勘の部屋のみおれバ式部の此所ぞと
 先よ立ち遠慮會釋も荒らうお襖を引開入りて見るよ文吾の影も形も亦くお勘一人有りけれ

バ式部の案よ相違して私よ心よ思ひけるの宵より此所お忍びて居しお文吾よまされ無りし
 が今此所お見へざるの忍術を以て隠れしあらんと最侮しくの思へども詮術おくて久平を見
 返り推問答お時移り早くも遁れ出しあらんと居間へ戻りて打臥ける

第二一回

斯てお勘の式部久平の出行しよより漸虎口を遁れし心地し然るよても文吾の君の何處よ潜
 みて在すらんはやくも家よ歸られし歎と案事煩らひ居たる折思ひも寄らぬ夜具長持の中よ
 り文吾の顯れ出で無のし氣をもみ給ひしあらん然のれ何程多人數よて取巻たりとて忍術よ
 て隠るゝ事の最と易しと謂お勘の打笑らひ我情夫とも心付りす太く案事まいらせたりし
 夫の兎よ角今宵の次第の久平と式部と譚合せて爲せし事と思ひ侍る未御身よも語らねど式
 部の嘗て久平と密通おして在けるを先頃我情よ見付られ謹愼く思ひ居しお我情も御身と情
 事ありと覺りみければ見露し良人が歸らば急速く斯くと告て身分等の罪を秘して御身と吾
 情を陥入ん心底あり幸おして今宵御身の早くも影を隠し給ひ彼等の計較の阻礙たれとや
 ばり此儘黙りて居ん良人が歸らば兩箇して尾跡を添て告口せん其時吾情が争ふとも益深

き式部なれば彼が言を信用し給ひ終る我儕の罪も陥ん夫是の事を案事るは此處にして捨も
 舎れず何と工風の無らずや一思案して給ひれと打勝文吾の大い書き式部と久平の密通し
 て在んとの露知らざりき然れ御身の語るも若く大人が論らば物事くらん斯う成るのら
 渠等兩個を亡ものにして後難を防ぐの外の有べうらす兎い語へ久平を殺害るの容易といへ
 式部めを人よ知らさす亡いんの最難事ならんと云ふをい語の打けして久平さへ討捨給ひ
 べ式部の吾儕は仕方あり必氣づかひ給ふると謀合せて天明ぬ際と文吾の急しく一問を出で
 鍛錬爲たる奇術をもて臺所の引窓より難なく屋上へ抜出て我家を向て降りける扱其翌日の
 夕景ふ至り文吾の竊久平を面會て明日の我家に珍客あり御苦勞ながら剛の夜網を御願ひ
 やたしと願れし久平の素好な業おれば最易き事なりと請合つゝ其日暮より手網を肩お投
 懸て魚籠を右手に携へ出行を見すます文吾の頭巾眉深に面を覆し覺えの一刀を腰に佩び見
 え隠れお跟お尾き來とも知らぬ久平の彼方此方と場所を遷み好き處と見定めけん一網さつ
 と投入て餘念なく引擧る時こそ好けれと背後より規ひすまして扱手も見せず肩先よりわ
 らへりけて大袈裟に斬下て死骸を直に流し蹴込其所より凡二町餘り距れし在郷の墓所に赤

り人もや來ると待ところに城内の使と覺しき足輕体の一箇の男子提灯携て通り掛るを願見
 の奴來參おれとさし脚ぬき足近寄て急所を見被て拳の清身にウツと仰反倒れける文吾の提
 灯を吹消て悶絶なしたる大の男子を最難々と引被ぎ以前の場所へ戻り來り足輕が帯たる刀
 を以て其所此所數箇所お疵を負いせ其儘刀を傍に打捨莞爾と笑て獨言よう斯うして置
 見ても相討とこそ思ふなれと匿打拂ふて歸りし最大膽なる所爲なり扱又此方百地の家小
 お勘の文吾と謀合せし式部を殺さん手談もぐなと種々お工風を廻せしが思ふは昨夜の終夜
 渠奴も睡らで明したれば今宵の勞れて熟睡べし今宵寐所へ忍び入り云々せんと側り熟睡
 の更るを待て居しガ聲々ど響く城の太鼓の早くも人定を報じける時分のよしと訪と起出式
 部が寐間を伺ぐまに案に違はず昨夜の勞れも前後も知らず熟睡て在れば頓て枕邊に入來り
 低聲に式部の名を呼べど覺る氣色のあらざれば仕済したりと懷中より準備の細帯を取出し
 傍の柱に楚と結着け其片端を持來り式部が咽喉を一匝ひし總身の力を双手に入れてグツと
 縊れハ聲さへ擧す空を攫んで苦みしが忽ち息の絶にけりお勘のホツと溜息を吐き胸腹下し
 て氣を鎮めやをら死骸を搔抱さ廣庭へもち出し井桁の上へ横よ臥し咽喉を縫し細帯よて双

脚を一束又結び其間より細引繩をくぐらせ數多の小石と拾ひ集めて式部が死骸の懐中はじめ
袂の中へ押入れて細引索を井桁に纏ひ死骸を井の中へ落せ細引索も両足を吊られ倒身
に垂りたるを彼細引を徐々延して漸水際に至る頃其細引の一片を投せば死骸は石の重にす
るくくとも水底深く沈みまければ手も残る細引を手繰り寄せ人の見ぬ間と最早我臥床
へ戻りしを知る人さらし無りける

第三回

斯てお勘の寢所へ戻り熟々思ふよう夜も明か家内の奴婢等式部が居ぬと疑がひて索も探も
爲す可きなれば寧男郎とこしらへて出奔の体も爲て置かば後腹痛すらしら安しと思へば頓
て起出て硯引よせさらくと言置を認めしが我腕ながら隨意ならぬ竿の運びの難が見ても
已自が手跡と見ぬければお勘を頼ましと筆を擲うち思案も頭腦を悩せしが不圖思ひ起せし
或時良人三太夫が門弟輩お語りし吾手跡を變んぬ竿の柄又重と懸けぬのうで並脈と
ころを緊急しはりて書とさの平生とい太く異りて見ゆと傍聴せし時のありしが如何で工風
の無らずやいと猶も工風をこらせしが襟こそあれと打點者針箱より糸と取出し筆の柄又結

ひ付けて長く鴨居の釘に懸け筆を空より吊下げてこころみお認むるも果して平生の筆勢と相
違し我ながら我筆と思ひねば思ひのまゝと認畢り式部が臥床の上も載置縁戸一枚開放し
此所より出し体もなし是もてよしと悠々と其身の寒間へ戻りつと被衾被ぎて打臥ける扱も
其明の旦家内いづれも起出るも式部が餘りおそしとて彼が部屋へ往て見れば人の居らずし
て一通の書置あり打集りて拵を見るよ

一私事花山院様に浮宮仕のうち深くやういせし人浮座いところ思はずも浮主人の仰よ
て此方様へ参り心ならずも月日を送りゆところよく思ひいへば一旦やのいせし人へ
對し探を破りし事うへすくも女の道立がたくと此度浮上京の浮留守をさいはひ此家を
のタれいで淵川へ身を沈めゆりくごにひまゝ一筆や残らぬも

しゝさふ

いづれもな

と認めありければ皆々大お驚きしが是のみあらで若黨久平も昨夜出しまゝ歸らずとの事よ
兎も角退人をうけて所在を索めんと村の人々を頼みて夫々手洗をあしたづねけるが久平の

夜網お往て毆闘を爲しと覺しく水中に斬殺され其傍に足輕体の者も數多の手紙を負て
 倒れ居たり檢視ふなりしが死人ふ日あし相討ふらんと定まりて事故なく濟けるが式部は終
 り行方知れず此旨早飛脚を以て京都へ報知ければ三太夫の取敢ず歸郷なし一々容子を認て
 久平の横死と憐み式部の家出を怒りしが猶心を鎮めて其書置を見るも式部が手跡といふ太
 異あして筆走りの容子文字の墨色並の筆よて書しと見へず筆よ勢なく字よ俗たりなく太
 さところも細き所もなくして宛刻の遺ふも異らねば意中私に疑ひて式部の筆さへ拙の
 らず家を出る書置を人頼みして書せんやうなし夫のみならず此種風の我門弟も示したる密
 書の書振よ倣ひたる筆の運びと思ひれたり仔細あらんと取つ舎つ考ふれども是どといふ心
 當りもあらざれば其儘よて打過しが其年も暮れ翌年も春と過ぎ夏もはや六月ととなりよけ
 る頃しも日照打續きて午天の炎暑よ堪うねし三太夫の其夕暮自身庭より下り立て井戸水を打
 撒しが乾きつたる折あらざれば撒どもく直ち乾きて井戸側深く汲揚す比及水最と濁り
 て臭氣あれは三太夫の大異み猶數回汲上るも女子の髪に毛と覺しく最と長き毛の二三三
 毛釣瓶に懸りて揚りたれば扱こそあやしと思ひしが釣瓶の筆短くなりて水も濁りずなりけ

れば明日の井の水を汲干て事の有無を見定めんと夫より居間より戻り下部を呼で明日の庭の
 井戸換を爲んと思へば出入の誰彼を雇ふべしと吩咐置てお勘よ對ひ最早時刻も好からんと
 語のお勘の心得て取出す衣類を着換つゝ家來を連れて出行の豫て約せし朋輩の招きの席と見
 らぬける

第四回

扱又お勘の去年良人の留守中式部を殺り殺し庭の井戸へ沈めし後良人が歸りし其當分容子
 如何よと案事けるお實よ出奔と思へるよや何の疑ひも無き容子あるよ初て安堵の思ひを
 し事もなく過せし今良人の下男よ分付明日井戸替せんとこの事よ流石の毒婦も大に驚き如
 何いせんと工風を疑せど明日と極りし俄然の事も何と思案も出離ければ驚き文吾を招き
 寄せ今日斯うくの事よりして明日の井戸替と極りたり若彼の井戸を汲替あば式部の死骸
 露れて我儕よ疑ひ被るべし到底も今度の通るべき辯も術もいねば今宵此家を逃出して遠
 さ他國へ奔らんと覺悟を極ていあり替て誓ひし言の若く我儕を捨トと思食あら連れて退立
 給はれと聽て文吾の最勝さしを暫時ありて答ふるよう御身の心定まらば我何とて否むべき

然はれ一つの難儀あり知らるゝ若く獨身の貧しき家も貯蓄の有べき様もわらざれば何との
 工風あせし上些の路費を準備せねばと半分聴てお勘の推止夫の氣配も及ぶまじ換て良人か
 準備も貯蓄置し資金あり我儕々錢を預り居れり取出すの最易しと語つゝ頓て立上り奥入
 しの間も無く來り金子一包文吾も逸興し員數の凡百兩余り是よて路用の足る可きやと聽て
 文吾の點首つゝ是さへ有れり氣の揉じ然らば今宵四時を合圖は庭口より出給へ切戸の邊へ
 待べしとぞめし合せて別れし文吾の我家へ歸りてより熱々心と思ふよう我一時の迷ひよ
 り師匠の妻と思ひて懸け罪なき者を暗討せしむと其爲す所の卑怯なる我あがらんと疎まし
 と後悔臍を噛ばりあり假令盜賊非人とても親分首領と稱する者も斯在卑劣な心持
 じと覺れば昔日愧くお勘の事思ひ絶て在けるものを意ひがげずも露見くゝる舊惡の手結
 の難儀と渠奴を詭し路用の金子の整ひたり然れ此儘我獨遠くへ走らば後に殘る渠奴の終
 り責苦も達て我事をさへ白狀せん然ら成ての妙あらす將何とせんとばかり思案ふ時を移
 せしが漸よして獨點首日の暮るをぞ待よける扱又お勘の良人の不在と幸ふ衣替の衣類備
 弁を風呂敷も推包み何時でもよしと身支度あし子刻の太鼓を待ちけるが其夜戌刻頃三太

夫の歸宅あ
 し太く酔た
 りとて臥床
 り入しがお
 勘の故と用
 ありげも未
 だ臥床も入
 らざりしか
 夏の夜の最
 短く四時の
 太鼓の聞へ
 ければお勘
 の相圖の時



我夫お勘を
 連れ他國へ
 奔り

刻ありと庭お下りて飛石傳ひ切戸を開きて首さし延べ。と見れぬ人影も文吾の君くと
語せも敢ず免りと閃く刃の稻妻肩先深く研付られキヤツと魂消る一聲お仕損じたりと曲者
いたとみおけて研付る手先狂ふて切戸の柱も三寸ばかり切込たり此物音も三太夫のかつ取
刀で駈出るお續て家内一統の來れる動靜も曲者の見付られじと血刀引提て通行向ふ百姓
ばらぐ手ゆく提灯點し連らね動搖々々來る一筋路身を隠すべき所も無ければ面を見せじ
と飛鳥の如く駈抜さま先お立つ提灯二つは切て落せば夫曲者と多勢を顧みに追取零を手
元へ寄せじと二三人を研倒し跡を暗まし逃失けり程無く逐來る三太夫農民輩の騒ぐと見て
何事ありやと忙しく問は今寄合の戻り路不意ふ一個の曲者ありて行違ひさま提灯切捨二三
人お手紙を負いせ逃行跡を追ふたれと夜道おれれば見失ひしと聽て三太夫の告るよう扱ひ女
房を研捨しも渠奴の所業と覺えたり何者ありしう見認すやと問へ一人答ふるよう扱ひ石
川文吾と認たりと聽より三太夫の取て返し文吾の家へ行て見れば人氣もあらねば自家へ
走歸りて女房の手紙を介抱してけるが熟々お勘が打份を見るよ最悪き衣服を着て居るのみ
う若替の衣類髪飾具を風呂敷おして持出るの語いねぞ知るさ亡命の支度と覺る三太夫の

手賃の耳も口を寄せ何者も研れしぞと屋間へと深手お弱り一言の應も無れば奴婢を築めて
詮議するよお勘のりねく石川文吾と密通なせる容子なりと一人が言は我も見たり我も知
れりど口々お語るを聽て猶よく札すよ去年三太夫留守中よ式部とお勘が深夜の詮議其大
の夜久平り横死式部り家出夫のみならず其夜明か一人の下婢が小川の戻りよ襖の間より覗
き見しお鴨居より筆を下げて書物おして在りし迄委曲聽て思ひ合す式部り家出の書置いか
勘が釣筆も成しあらん察する所式部を殺し死骸を井戸へ沈めしが明日井戸替の沙汰を聞き
悪事の發露を恐るよより今宵此家を出奔せん心積りて在りしあらん情みても情惜き我姑よ
こそと怒りしが然るおても奸夫奸婦が謀合せて打連立道楽可きよ情郎の文吾が及お罹りし
の何とも思ひわき難し容子あらんと詰試むるお勘のいつの息絶て今更すべきよらも早く先
死骸を取片付免よ角明日の井戸がへおて疑念の晴るべしと其夜の孰も眠らず明し其翌早朝
人夫を雇ひ彼井戸をくみ乾せしよ案の如く死骸あり引あげて點検るに形は腐爛れて見分難
れど衣裳の式部の寝衣よて疑がふ可くもあらざれよ三太夫を初奴婢輩も疑念の致お解ける
が式部無慙の死を憫みお勘が毒惡よ舌を卷き憎まぬ者の無りける扱夫より式部が亡骸の

棺ふ納めて其井戸に埋葬一段小高く築立て芝を伏せ墓碑と建て最期の場所を其儘よ墓所と
 させば里人等聞傳へて哀を催ふし誰か名付しとなく後の世迄伊賀の式部家とのこれ迄なり
 間話休題石川文吾の人知れずお勘を殺して殃の根を斷ざれぬ末遂お我悪事さへ發露せ
 んと思へ其夜切戸口より出る所切懸し手先狂ふて充分討めざるのみならず三太
 夫追駈られ里人の群取返られ二人三人お剣を負ひせ危く其場を遁れし事悉意中と組
 離ひ面をさへお見られてければ此土地の住居がたしと其儘京都へ奔りける其頃豊臣秀吉
 公の洛東お大佛殿御建立の折柄おて河原の殊お繁華なれば文吾の此邊好るべしと大佛前
 面お家をうり石川五右衛門と名を改め此所お住居をなしけるが單身の浪人おれば誰お憚る
 事もなく放蕩お儘お暮しけるゆへわづらの間お貯蓄の金子の悉皆遣ひ場詮術なくて覺へた
 る忍びの術の師南を爲し世を渡らんと思へども是さへ百地お所縁の者か此地お在と聞てけ
 れば百地へ知れてお身の上なりと種々お工風を爲しけれども如何とも詮方なく流石お覺の
 五右衛門も最便おしと唧言めり

第五回

爰お城州淀の城主お木村常陸之助重高と云ふ大名ありける父隼人佐の秀吉公未だ御小身の
 頃より随従おし屢々戦功ありしが別て賤ヶ嶽の合戦に柴田勢を退崩し越前お入りての勤功
 拔群なりとて其恩賞として當城の主と成しなり其後幾許もなく病死なしと秀吉公太く惜
 ませ給ひ其子常陸介お家督を相續せしめ本領安堵の命ありて父よりならず昵愛なせしが或
 時近邊の遊女町おて初て石川五右衛門お面會し其後時々面を合せいつとなく懇意おあり
 其相貌鄙ららず殊お辯舌爽りて天晴役お立べき者と思ひおければ折を見て或日五右衛門
 を招きよせ種々響應て話談けるが其節此五右衛門が忍術お精を初て知り歡喜事大方なら
 ず夫より直お弟子とあり忍びの術を學びけるが原來此常陸介の武術総て鍛錬おして伶俐の
 性質おありければ上達最と速りて僅の間お大方お覺へければ太く喜び猶怠惰なく修業せ
 しが此頃師匠五右衛門の窮せし容子を知りければ金錢衣服不足お時々贈り與へければ最
 安樂お暮しける此時豊臣秀吉公おの關白職を御猶子の秀次公に譲り給ひ太閤とあらせ給
 ひし其節秀次公お語り給ふお木村隼人佐の數年の間我が老臣の職お在りて最愛度筋目お
 れば御身も秀吉の果報を繼て彼が子の常陸介を老臣とあして召仕おれよと父君の命を如何

で背のん謹で命を畏み頼て木村常陸介と老臣よぞ擧られける技よ於て常陸介の時以て口
 秀次の執權職と仰がれて威勢おさく父の代不劣らぬ迄よ時のさけるが彼石川五右衛門
 の常陸介よ忍術を授けし師家よ當るを以て數多の祿高よて召抱へんと人をもて談入らるる
 お五右衛門の答ふるより我身の仕官望ましくらず河程多分よ祿高を給ひるとも請はせじ此
 儀の免し給へりしと辭退るを聽て常陸介の彼非凡の器居われは倍臣を嫌ふあらん退て殿下
 へや上げ御取立を願ふ可しと心よ思ひて再度強ひず時機の到るを見合せける扱又石川五右
 衛門の性得氣隨我儘かれは嚮よ木村が召抱へんと談を聽て打笑ひ奉公の窮屈ある主人持の
 面倒奇る談話小聞さへ最五月蠅人世話五十年其日くを面白く娯樂く察せる身で在るか
 些少よ貰う米搗虫の朝うら晩迄低頭の仕詰め嗚呼物好事の世よ多しと獨言て居し程かれは
 常陸介が執權よ成し後の氣づまりありとて木村方へも疎遠よ過しが常陸介の心よ付け時々
 金銀を贈りしが在る在る限り其日の中よ費ひ竭すが平生かれは何程有りても不足よて無くら
 發る盗心類を以て笑る友朋の人を殺せし浪人者盜賊過半の賭博士其他無類のあふれ書か
 ど多く交際を結びけるが威五右衛門が技量よ伏して推て是を棟梁と定め忍びく此所似

の豪農富商の家よ押入強盜よ世を送りしが其頃太閤秀吉公の城州伏見お御在城ありて諸大
 名の邸宅の京大坂お多うりしが其頃京都千本通りよ前野但馬守の邸あり抑此前野但馬守の
 但州出石の城主よて三方石を領せしの内福の聞えわれは豫て五右衛門の隙を覘ひ何とぞし
 て金銀財寶を奪ひ取んと心懸て居たりしが此頃風と一つの謀計を案事出し手下の浪人衆衆
 の權六を招き斯々せよと計策を示して出し遣り續て小賊兩人を呼て是も何事をか明きて
 出し遣り夫より子分子方を夫より夫と呼集めて一個兩個づゝ家を出で千本通り前野が屋鋪
 の邊よ忍ませける扱筑紫の權六の五右衛門の計策を請て大小美々敷形容を装ひ供人を召連
 前野が邸よ入來り五奉行石田治部少輔が家來島六郎左衛門と名告案内を乞ひけれは門番よ
 り立開よ通じ頼て出來る取次の武士いざ此方へと使者の問よ誘引其來意を問けれは夜分推
 參致せし別儀よいはず今晚俄然の御評議有て當家の御主人但馬守公即刻御出仕有可きよ
 う傳達方の仰を承し主人治部の少輔の殿下の性急を知るを以て殿中よ於て小臣へ使の命を
 や付け疾く行可しと打聽て不取敢走奈りしかり御用の趣旨の辨別されと急遽の事件と思へ
 れたれば疾く御登城有さ欲し遅々せば互お落度とあらんと演畢りたる口上振人相骨柄鎌が

見ても履物
ありと覺る
可き主人よ
斯と通トけ
れバ但馬守
の御召と聞
委細畏り
奉る是より
直又參上せ
んと承とち
して使者を
返し夫支
度を整へて



其身の馬又打乗て供人數多ふ前後を護せ伏見を向て出行し夕東洞院へ入りける頃押人一人草
鞋を穿更んとて行列を外し道路の傍へ俯向て草鞋の紐を解折節伺ひ遊し一個の曲者慶を
もりけず抜討し腰のつがひを研裂れアツと叫びて駈出す前面は同ト妻の曲者一人立塞りて
抜手も見せず肩先見かけて打と斫れば其儘と倒る所を曲者二人の立撲り死骸を肩より引増
ぎ引返して千本通り前野が邸の門前ふ至りわたりしく門を敲き藤の森近く御出の途中何者
ども知す多人數めて討て蒐るよ先手を初め御近皆衆迄抜合せ防ぎ戦ひいへ共夜分と云不意
の事故御前様も手を負せられ最々危く見ゆ急ぎ御加勢然べし斯く語我等も深詫ふてと打
聽て門番の大は驚き聲高く斯と家中へ通達させバ宿直の番頭武頭左衛門の追取刀で玄關を
駈出注進の者を此所へと差圖は門番の潜門を内へ開けバ扉又連て轉ひ入たる押役の春兵衛
肩先并腰車骨を深く斫られて早息絶て在る何れも何疑はんソレと語ふより我勝れ得物々を
引提て急げくと出行を傳へ聞たる家中の面々主人の身の上御家の大事と老人子供を除く
の外我もくと出行ける遠見の報知ふ五右衛門の鎖帷子に小手躰當筋鉄入し宵頭巾大袷
を杖又突き出るふ隨從荒者の各々得物を携て松原通り前野が邸の表門へと向ひける此時

筑紫の權六の屋敷の案内の我こそ知れと眞先に進み門の扉を荒らうと打敲き御注進と呼ん
れバ夫といふより潜戸を開くよ付入る權六が飛込あがら抜討ふ右と左へ門番二人を斬倒
して大門を開けバ一同込入しガ跡を閉鎖して戌守を置き人の出入を禁めつゝ夫より五右衛
門下知すらく女子童子の勿論されも男子ありとも手向ひせすバ其儘として拾置べし目指の
金銀武具類あり雜物も眼を注ぎて忙ぎて絆と誤るゝ詭策出せし家中の奴輩の夜明からでハ歸
るまじ緩々拵了いへど不敵の下知も手下の者共勇み進んで玄關より奥を眼掛て乱入まけり

第六回

此時前野の御殿より殿の御事氣遣しと殘る老侍打寄て留守の邸ふ心を配り奥表の見廻り杯
交り代りよ爲てける折柄表門より夜撃と覺しく大勢が乱入爲すお驚く物から向あるを推
參あり老人達老との雖千場萬場戦ひ慣し者共あれバ得物々を打振て切て切るを見る賊徒
の是の如小才ある老童奴等無益骨折らすよ金銀を此所へ並べて引籠居れ手向ひ爲さハ擊殺
すぞ汝等が主人と頼む但馬守の最前よ藤の森よて捕捕たり主人の命助け度バ貯蓄の財寶と
差出て命乞ひを爲す可しと聲々罵詈雑言を聞より扱の盜賊よ奇武士の途へ押入しハ命知らず

の白痴者筋鉄入し老人の腕まへ知れと切て入る侮難き太刀風よ流石不敵の賊徒等一時ハ
靡きのよりしが多勢ふ少勢の事あれバ盛返されて一人討れ二人斫れて手剛き者の大方死て
殘る手負を十餘人高手小手よ縛めければ中間下部の栗ひ置き遣へと爲れと出口くハ拔身
を提て成り居れハ皆一所よ潜屈て聲さへ出し得す居たりける夫より賊徒ハ奥殿へ至りて見
るよ多くの女中奥方を中よ圍ひて手よく持し長刀の鞘を外して近寄バ斬んど扣へし狀勢
ハ優くも亦猛りける五右衛門ハ是ハ眼も注す床よ飾りし具足櫃を座席の中央よ推据させ
頼て其ハ腰打掛捕たる侍と面前へ引出させ踏居たる小使一人引摺來りて此武士の役口
を一々尋ね問ひ勘定奉行ハ側用人の兩個ハ對ひ軍用金の在所を問へハ側用人ハ頭を擧げ五
右衛門をはつたと疾見汝欲くハ探索て持て行け我誤つて盜賊の汝等の爲よ穢れたる纏の
恥を受けし上の活て在んハ快うらす早疾く殺せ番生ハ問答爲可き口ハ持たずと叫て五右
衛門ハ冷笑ひ言して見せんと手下の賊ハ眼配せ爲れハ立上り脊後へ廻りて鎗の柄を擡り上
たる索の間へ衝と差入て綱上げれば齒を喰ひ切る苦痛の体を見て五右衛門ハ打笑ひ瘦我假
を爲んより疾く在所を誘るべし語すバ汝のみみならず但馬守を初めとして婦女童幼も切捨ん

夫でも白状爲さずやと屋々詰れど眼を閉ぢて一言の答へもあければ此奴中々執拗し今一人
 と責て見よと眼で差圖を承りぬと衝と立上る一人の小賊勘定奉行の背後へ廻れば彼侍
 の早くも聲りけ責らるる身を庇ふにあらぬと語ねば罪なき婦女子迄言せらるる不便あり
 金子の世界の融通もの身命の真よりけ替無し用金の在所の語而て呉んど悉皆語り聞せけれ
 ば五右衛門の手下の指揮し残らず此所へ持出させ自己の腰を打掛し具足櫃を打割し其空櫃
 へ金子を納め屈竟の若者泉半藏木曾川彌八の兩個も持せて先へ歸らしめ此上の銘々も勝
 手次第分捕せよと差圖を得たりと小賊共金盞の品々選取て悉く重き懐中の中へ預り上よ
 積重ね勇み歡び歸り行後見送りて五右衛門の何思ひけん大刀引抜き金子の在所を結りたる
 勘定奉行の前に立候病不忠の祿盗人主人が歸らば言譯のらじ到底も逃れぬ汝が命いで介借
 してとらせんすと語も終らず振下す刀と共に彼侍の首の前に落よける五右衛門の刀を
 納め残る手下を引繼の徐々と鎗を出裏門より出行ける扱又先刻押役が報知も我勝も駈出せ
 し一家中の面々の息を限りも藤の森迄逃げけるが此邊りの人々だも在ることなく寂莫とし
 て音も聞えず餘りの不思議と社家を敲き申夜よりの動靜を問ふも別な變りし事もなしと答

ふるよより益々惑ひ迷ふ面をし合て洞然として居たりしか此所迄來れば一足ふて伏見の
 地なれば兎も角おも主人の動靜を身届けんと評議ありて一統も伏見と向て急ぎける凡十
 町余りも來たりし頃前面より提灯數多點し運れて大勢の來る者あり近寄て見れば資料ん主
 人但馬守殿の供連をり送よ是いと驚きけるが疾くも但馬守殿の馬を駐められ何事ありて
 來りしやと尋ね給ふも老臣何某馬前へ進みて斯々の注進を因り直ちも藤の森迄馳着ては
 へども變事も無くて安心の中も最々不審く兎角伏見へ參上し御動靜を伺へんと此所迄參
 り今不圖も恙も在ぬ御尊顔を拜し奉り漸く安堵仕づりしといふを委曲も打聽給ふ但馬守
 の眉を擡め座の最奇しき事ありし我も先刻石田より急ぎの使者の口演を實と思へば途次
 を急がせ伏見の城へ來りて見れば城門の已も鎖し事有る可しと思はれねば供頭を以て五
 奉行の今猶退出爲られずやと問せし所答ふるも平生も増して今日の退出最う早かりし
 と聽て不審と思へども兎も角石田も面會せんと夫より石田が邸へ到り治部も面會しうく
 の御使者も因て參着せりと語ら治部の最不審氣に座の何等の相違にや殿中の無事平穩にて
 今日の倭より退出も早かりし程よして夜分の評議殿の御召の努めだも有ることなき如之

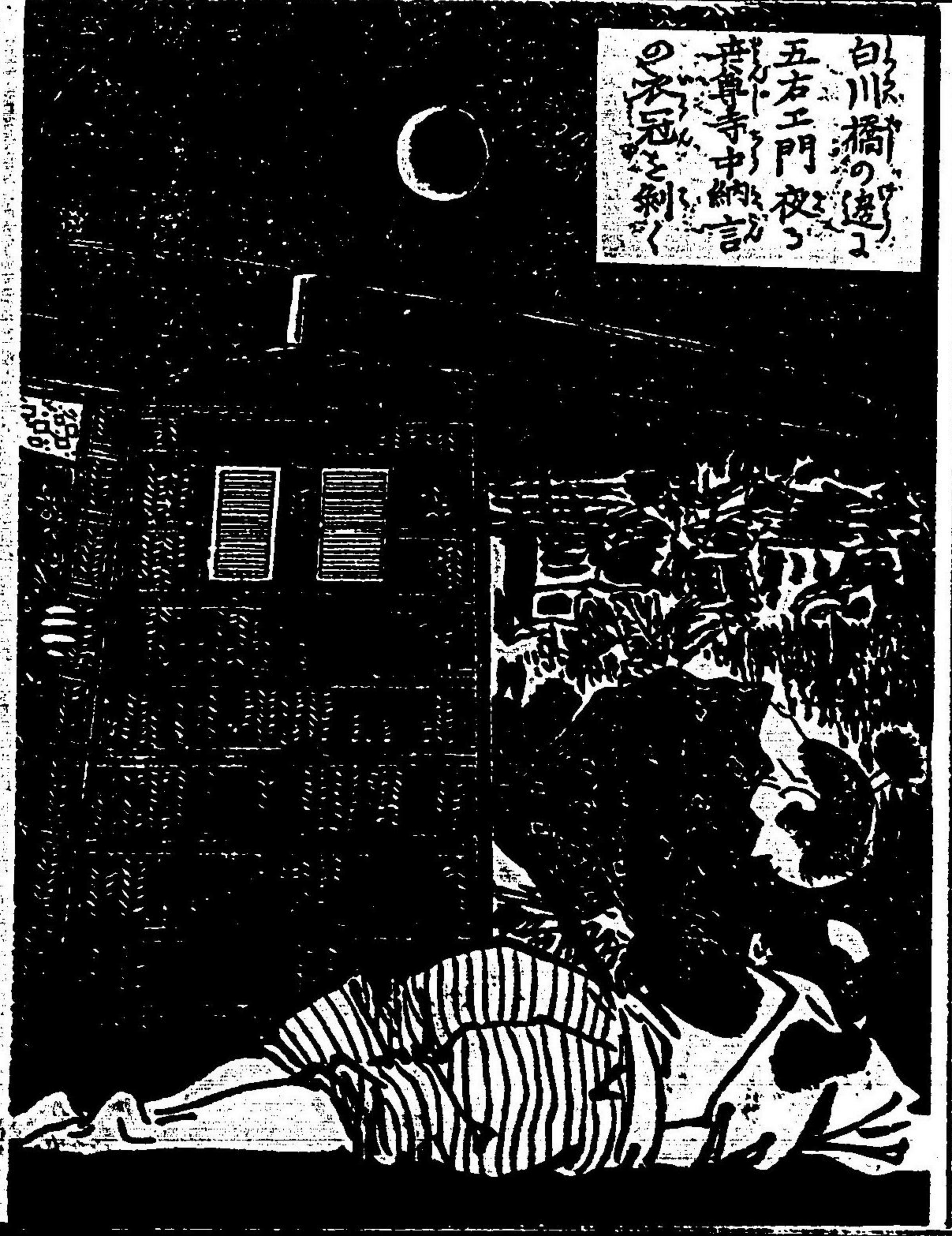
我家臣一島六郎右衛門と名告る者の未だ聞もいらず取次の者の誤聞う然らずの何者の悪業
 う兎にも角も釣出されし御身の外聞宜しうらじ三成他言爲まじきされバ今宵の中引取
 て他聞を防ぎ給へりしと論をうけし意外の恥辱思ふ但馬も恨みを抱く者の所爲よいのん
 の能も糺さで輕忍しく出来りしに疎忽ありしと謝つ頼みの言置て然で今此所迄歸るあり聞
 が如きの唯我を自拔のみあらずして跡に留守する一家中て流言をもて騷亂せし内容易な
 らぬ珍事ふこそ家中擧て此所みなれば邸の甚手薄よて心もとなき極りなり疾く歸らんと語
 らるゝを打聽毎驚きさて留守の邸を案事られ途中を急ぎて松原通が千本の邸へ歸り着しに
 恰好今五右衛門が引揚げし跡と思ひれて裏門前を通行折と見れば扉の左右開け邸内の開
 の沸が如く提灯點して彼方此方と奔走するの扱こそと其所より直ち内入り内玄關より
 奥へ通り見れば館の戸障子碎け道具の其所此所散亂し疊の血染み染りてあり折ぐら一間を
 出給ふ奥方の大勢の女中を通して今宵の始末を逐一語り給ひけるを聽居る人々無念く
 と拳を握り齒切をなし詭欺られしを怒りつゝ頓て表御殿へ出給へり斬殺されし死骸の取片
 付手負の手宛われこれと爲て在けるが殿の御出あ一人の老黨進み出防戦の狀勢討死屍負の

名姓などを言上し扱廻々諸道具を調べらるゝ軍用金を初め武器重器悉皆奪ひ取れてけれ
 ば最と口惜しき事なりと思ふ物ら大名が賊お遣ひしと聞えては世間の誹謗も恥しけれバ
 此事件一切沙汰爲べりらすと一家中へ通達し忍びくみ盜賊の詮議を爲せしが是ぞと思ふ
 手懸とてい無りける

第七回

話説すこゝは大間秀吉公の其頃殊の外茶の道を好ませ給ひ時々茶會を催し給ひしが上の好
 むところ下これに倣ふの理も洩れず世上一般に流行して此道の達者も亦多く其中ある千の
 利休吉田織部小堀遠州勢田掃部等の高名き人々ありけるが爰も石川五右衛門の藝日よ
 前野の邸お押入思ひの儘に金銀を奪ひ取夫を以て歡樂又世を送りしが次第に驕る心出で更
 角富家高貴の人の遊びを真似たく思ひければ早晩となく歌の道茶の湯なぞも心を入しが其
 頃も利休が所持せしあられ釜の天下の名器と聞及び俄に愁しく思ひければ或日利休が他出
 を覗ひ竊み盜て往歸り己が園に懸置て折々樂しみ居たりけるとや此頃に至りては大家富家

老女一個臥て居
 たり此奴の官女
 の守護と爲す老
 女よてやわらん
 眼差處も程近し
 と二歩三歩進む
 ところ不思議者
 るうな灯臺の暗
 のらずして行先
 見分難さの如何
 んぞやと必を鎖
 めて灯臺の燈火
 を挑げて差歩拔



歩又もや奥へ行
 うんどすれハ兩
 眼暗みて五体縮
 み脚の踏所も定
 まらねバ立止り
 て來りし方を振
 返り見るお眼も
 明らかふ本お復
 せバ胸を撫で又
 亦奥へ行んどすれハ忽五体戦ひ慄き一步も踏出す事叶はず流石剛氣の五右衛門も倒れ果て
 居たりしダ心の中と思ふよう装束を着て來りなバ自由自在又出入べしと思ひし事ハ兩餅な
 りし我是迄思ひし事を徹さで過し事なりしダ今宵只今不覺之とり寶の山へ入ながら手を



空くして歸るとい扱も無念と齒切をなし身も概たる装束を引裂てりなぐり捨尻引のらげて
身輕ふなり宮門高堀忍び出で我家をさして歸りしが茲に世尊寺中納言季忠卿の館に歸り其
夜の中よ家來を以て白川に於て斯うくと事の次第を委細に傳奏へ届け出られる扱其翌
日禁中あての后町御殿鈴の口は冠装束打捨ありし旨局方より奏し給ふ此に於て殿上の沙
汰となり時の關白内大臣秀次公をはじめ傳奏議奏の諸卿評議ありしが昨夜世尊寺中納言よ
りの届けも有れば此彼照り會す季忠卿の装束も相違無しと知るものうら有問敷き塔所よ
落遣し在しを不審なりとて誰彼も思ひ別で在せしが五奉行の内裡掛前田徳善院法印の智慮
深き人として暫時勘考て居られしが頼て衆公卿のうち對ひ是の立以が思ふ所の世尊寺季忠
を引裂たる盜賊が其装束を若て公卿の打掛内裡へ忍び入しあらんる想像を以て推とさる官
女の中お心を懸け色情より忍び入鈴の口迄至りしが殿内の威光は畏懼れ奥へ入る事叶
ずして装束を捨て遁れしならん若し然も無く季忠の遺恨を含む者ありて内裏の禁制を
破りたりと我々お疑ひしめ彼季忠を罪に陥さんと謀りしも亦知る可のらす兎も角も人

と書し公卿と引裂し其上ならず内裡へ忍び入たるの容易ならぬ盜賊なり忽緒に捨置がたし
嚴重に詮議すべしとやされければ衆公卿皆最と同意て夫より掛の役々へ通達ありて其
日より最も嚴しき穿鑿なれども遂終知れで過よけり
濱千鳥眞砂の白浪上巻 畢

明治十六年十月廿九日出版御届
同年十一月 出版

定価金十五銭

編輯兼 春陽堂 岐阜縣平民
出版者 和田篤太郎 芝區新櫻田町十番地

東京地本同盟組合章

香 庄 香 庄 香 庄 香 庄
香 庄 香 庄 香 庄 香 庄
香 庄 香 庄 香 庄 香 庄
香 庄 香 庄 香 庄 香 庄